当家所蔵写真について

代表取締役会長　鈴木英介

昨年、斎藤家別邸蔵で当家が北洋漁業をやっていたころの写真展を開くことができた。これは新潟大学の地域映像アーカイブセンター原田先生が中心となり、膨大な写真をデジタル化してくれたおかげである。





当家所蔵写真の中で最も古い写真は、長崎の上野彦馬の写真だ。上野彦馬と言っても写真に興味のある人以外は知らないと思う。坂本龍馬の有名な写真や勝海舟の写真などを撮った人と言えばわかると思う。長崎でオランダ人から舎密学（化学）を学び、蘭書から写真術を知り、研究の末、写真師となった。日本の写真師の開祖とも言われている。

大倉喜八郎とその兄、定七の写真だ。西南戦争で大倉組が陸軍の後方兵站を請け負い、長崎に拠点を置いたときの事だ。明治10年（1877）位だろう。

多くの人の「明治」のイメージは鹿鳴館や、新橋に開通した汽車の錦絵だ。学校の歴史の教科書に出ている。しかし実際の人々の生活はそのようなものではなく、明治も始めのころは江戸時代とたいして変わらない。年号が変わったからと言って、すぐに生活が変わるわけではない。明治9年に廃刀令なので、明治一桁ではちょん髷に刀がほとんどだったのではないか。それでも明治5年に新橋横浜間の鉄道が開通したという事は大変な変化だし、スピードだ。





次の写真が東京印刷局。今の大蔵省印刷局だ。大倉喜八郎と兄定七と姉貞が3人で写っている。明治17年だ。

東京印刷局は日本政府が紙幣を作るために作った機関で、外国人技師を雇い、写真術と印刷術を学ばせた。そこで一時期写真館もやっていた。明治11年から19年の間だろう。

他に「北の海へ」に使った樺太の写真がある。これは間瀬屋9代鈴木佐平の撮った写真だ。

当時の北洋漁業家でオーナー自身が漁場に赴いた人は少ない。その中でも写真機を持っている者などまずいなかっただろう。そのため樺太漁場の写真というものは、これ以外のものは知られていない。これも貴重な写真だ。明治40年代から昭和10年代までの30年弱の事だ。同時期新潟の金井写真館で撮った集合写真がある。この2枚の写真は北洋漁業に乗り出したころ明治42年と、昭和4年だ。この2枚の間にちょうど20年がある。明治の写真は中央に鈴木佐平、間瀬屋の8代になる。その向かって右隣学生服姿は後に佐平を襲名する長男貫一郎である。18歳だ。それ以外の人は各船の船頭および幹部、通訳だ。





昭和の写真になると中央洋装が38歳になった貫一郎である。樺太の写真は皆この人のカメラだ。

あと新潟ビルサービスになってからの写真がある。これは1956年（昭和31）の創業から1966年の新潟ビルメンテナンス協会結成までの10年間が多い。ちょうど創業の前年に新潟大火があり、その復興により新潟市中心部にビルが次々と作られ始めた時期にかさなる。ビルサービスという仕事はその時はじめて新潟で認知された。

それ以前の新潟市は、木造平屋建てがつらなり、大和、小林の両デパートが柾谷小路にあった以外、ビルらしいビルは少なかった。そして自動車も少なく、馬車も走っていた。

初めてのビル、初めての自動車、初めての仕事。意気込みを感じる写真だ。

大火後、柾谷小路ぞいに次々に建てられた、鉄筋コンクリート造のビルを写している。この時の写真は新潟ビルサービス第一号社員といえる現サンビルサービス会長、関谷氏の撮った写真が多い。

写真は私たちの歴史を写す。人の営みが営々と続いている事の証だ。当社も創業から64年、多くの人に支えられ今日がある。

